『痴人説夢記』における『三十三年の夢』の受容

寇　振鋒

１．はじめに

宮崎滔天の『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』および『三十三年落花夢』は、少なくとも 19 版まで刊行された。[1] 漢訳本は清末中国において政治的影響力が相当強かったばかりではなく、[2] 当時の文学作品に与えた影響も無視できないと思われる。例えば、魯迅によって「四大譴責小説」と命名された清末の著名な小説の一つである『孽海花』は、漢訳本『三十三年落花夢』を通じて『三十三年の夢』の影響を多大に受けたものであった。[3] 同時代に『三十三年の夢』の影響を受けた清末小説が、『孽海花』のほかにあるのかを引き続き考証していく必要があると思われる。義侠である日本人天弢竜伯が登場する『孽海花』が『三十三年の夢』と深く関わっているのと同様に、同じく日本人志士である藤田宮錬、吉田晋二が登場する清末の著名な長編小説『痴人説夢記』についても、『三十三年の夢』との関係を窺い知ることができる。

『痴人説夢記』に関する先行研究は、この小説を各視点から相当評価している。[4] しかしながら、管見の及ぶ限りでは、『三十三年の夢』との関わりに関する先行研究は見当たらない。

そこで、本稿では清末小説『痴人説夢記』を取り上げて、日本の『三十三年の夢』とどういう関係にあったのか、さらに『痴人説夢記』が『三十三年の夢』の影響を受けていたか否かという一連の問題を明らかにすることを目的とする。

２．『痴人説夢記』について

旅生 [5] の 『痴人説夢記』は中国で発行された半月刊の小説誌『繡像小説』に連載された長編小説である。『繡像小説』は 1903 年 5 月に李伯元によって創刊された中国大陸の最初の小説専門誌である。[6] 『痴人説夢記』は、この『繡

像小説』の第 19 期（1904 年 2 月 16 日）～30 期、第 35 期～42 期、第 47 期～54（1905 年 7 月 17 日）期に連載された 30 回で完結する大作である。そして、『痴人説夢記』は、清末小説において最も早く完結された長編小説である。[7]『痴人説夢記』は、清末十数年間の社会の歴史を描いた作品であり、それは康有為、梁啓超の維新運動以前から始まり、義和団事件の後で終わっている。主人公賈希仙は作者の理想を体現し、寧孫謀と魏淡然はそれぞれ康有為と梁啓超を、黎浪夫は孫中山を代表すると言われている。[8]

賈希仙、寧孫謀、魏淡然は同じ教会学校の親友で、教会の教育を嫌って三人は湖北から上海へ赴く。途中で賈希仙が寧孫謀、魏淡然とはぐれてしまい、以降、小説は三つの筋に分けられた。賈希仙は酒楼で詩を書いたことにより、謀反者と間違えられて捕われてしまい、護送される途中で海賊船に救われ、首領にまつり上げられた。後に仙人島に流れつき、仙人島の開拓を主張する。一方、寧孫謀、魏淡然はそれぞれ瓜州で慕隠、綴紅姉妹と結婚した後に、二人は北京へ官吏試験を受けに行き、寧孫謀は合格した。維新の意見書を上呈して皇帝の寵遇を得たため、政権はほとんど寧孫謀の手に握られたと言ってよい。しかし、旧勢力が彼を陥れ、逮捕令が出ていたので、寧孫謀、魏淡然は日本への亡命を余儀なくされた。もう一つの筋は、革命を主張する黎浪夫が蜂起を企て、失敗に終わったことを描いたものである。小説の最後は、賈希仙の仙人島での成功、および未来の中国を夢みている場面で終わる。そこで、三つの筋も結局、一つに帰した。

この小説は、「維新、革命と殖民の三つの筋によって展開して描かれている」[9]と指摘されているように、三者はともに国家富強に着眼するが、しかし結局、仙人島に海外殖民を主張した主人公賈希仙が大成功を収める。作者は中国を振興させるという大前提に立ったうえで、維新と革命を矛盾ととらず、ともに積極的な評価を与えている。作者は維新と革命に賛成していないものの、代表的な人物の寧孫謀、魏淡然、黎浪夫の抱負に対して敬意を払っている。つまり、作者旅生は維新と革命の間で中立的な立場をとっていたと思われる。

筆者の調べた範囲で、『痴人説夢記』は連載後、単行本化されなかったものの、今日までに、少なくとも四つの「小説大系」に収録されている。この四つの「小説大系」とはそれぞれ、台湾で出版された『晩清小説大系』、[10] 中国大陸で刊行された『中国近代小説大系』、[11]『中國近代珍稀本小説』[12] および『中国歴代珍稀小説』[13] である。そして、この小説は最近、インターネット上でも無料

で公開されたため、今後、さらに多くの読者を獲得することができると思われる。[14] 以上のことからも、当該の小説が重要視されていることが分かる。

以下、『痴人説夢記』と宮崎滔天の『三十三年の夢』との影響関係を探ってみることにする。

３．発行時期から見た作品間の関わり

まず、『三十三年の夢』とその漢訳本『三十三年落花夢』および『痴人説夢記』のそれぞれが発行された時期に着目し、前者が後者に及ぼした影響の可能性について考証してみる。

『三十三年の夢』は『二六新報』に連載されてから、1902 年 8 月に国光書房から単行本として発刊された。漢訳本『三十三年落花夢』は国学社から 1904 年 1 月 12 日に刊行された。『痴人説夢記』は 1904 年 2 月 16 日の第 19 期から 1905 年 7 月 17 日の第 54 期までの間に『繍像小説』に連載されたとされる。[15] また、後述のように、明確な影響関係を持つと思われる『痴人説夢記』第 16、17 回はそれぞれ、『繍像小説』第 38、39 期に掲載されている。最新の研究を合わせて考えると、第 13 期から『繍像小説』刊行の日付がなくなっていることは、予定の刊行から遅れていたためだと思われる。第一年分の第 1～24 期は 1905 年 1～3 月にようやく出そろった。これは予定より九ヶ月遅れていた。つまり、『痴人説夢記』連載開始の第 19 期もかなり遅れていたと考えられる。なお、第 38、39 期を含む第二年分の『繍像小説』の発行時間はさらに遅れ、1905 年末或いは 1906 年の初めに発行され、やはり予定より九ヶ月も遅延した。第三年分の第 49～72 期は、ようやく 1906 年年末に出そろい、予定より十ヶ月も遅延していたとされる。[16] 以上により、『痴人説夢記』の連載前に『三十三年の夢』の漢訳本はすでに公刊されていたことを窺い知ることができる。

そのため、上述の情況に従えば、『痴人説夢記』の連載開始の時間は恐らく、1904 年 2 月ではなく、約九ヶ月遅延した可能性が非常に高い。つまり、作品の発行時期から見れば、『痴人説夢記』が『三十三年の夢』或いは漢訳本『三十三年落花夢』を受容した可能性は十分あると考えられる。

４．プロットに見られる影響関係の明瞭な点

具体的にどのような点において『痴人説夢記』は『三十三年の夢』を受容したのであろうか。以下、影響関係のあると思われる明瞭な点を項目に分け、両

作品のプロットを対比してみることにする。

（1）　両作品における尋問および逮捕の描写について

『痴人説夢記』第 7、8 回では、主人公賈希仙たち六人が広東城乗っ取りの計画に敗れて海を漂い、日本の東京にたどり着いた。しかし、間もなく清国の大使館のわなにかかり、一時逮捕された。結局、六人は日本外務大臣中村監輔（仮名と思われる）に救出された。この時の日本での逮捕は、阿英に「作者（旅生――引用者注）は孫中山のロンドン亡命の事実を借りて賈希仙にあてはめた」[17] と指摘されているとおり、作者旅生がロンドンを東京に変えて、「東京被難記」に書き換えたものである。

実際、孫中山の『倫敦被難記』の初版は 1897 年 1 月にイギリスで刊行された英文版“Kidnapped in London”である。一方、宮崎滔天によって日本語訳された『幽囚録』は 1898 年 5 月～7 月に『九州日報』に訳載された。しかし、最初の漢訳本と見られる甘作霖によって漢訳された『倫敦被難記』は 1912 年 5 月にようやく上海商務印書館から出版された。

『倫敦被難記』が『三十三年の夢』の第 16、17 章に簡明に触れられていることから、旅生は、『三十三年の夢』に基づいて「東京被難記」を描いた可能性も否定できない。

次に、『痴人説夢記』における、尋問および逮捕に関する描写が、『三十三年の夢』の第 23 章「新嘉坡の入獄」から受容したものであるか否かについて考えてみる。

① 二回目の日本での尋問および逮捕について

『痴人説夢記』第 16 回において、志士東方仲亮と孟核は海上で鯨と格闘した後、日本の横浜に漂流してきた。そして、この二人は宿泊先で、日本に到着したばかりの賈希仙、侠夫と再会を果たした。四人が再会を喜んでいた際に、賈希仙は、その場で日本の警察に逮捕された。旅生はこの二回目の日本での逮捕について、次のように述べている。

> ちょうど興味深く話し合っていた際に、店主が連れて上がってきた警察が彼らを目にして、「中国公使は勅命の犯人賈某がここにいると言ったが、まさかあなたではありませんか？」と言った。賈希仙が立ち上がって、「私が賈某です。ただ貴国の警察署は、弊国のために人を捕えるには及びません。」と答えた。その警察は、

「私たちは貴国のため捜査するのではなく、ただ警察署に来てもらうだけで、いきさつを聞いてからでないと、留めておくことができません。」と言った。希仙は拒否することもなく、すぐ立ち上がって彼について行った。[18)]

しかし、「日本の官吏はみんなとても礼儀正しく、彼の無罪を知った後に、釈放する」[19)] という結果となった。こうして、賈希仙は拘束後、しばらくして日本の警察から釈放された。一方、『三十三年の夢』の第 23 章「新嘉坡の入獄」の冒頭には、「文明的警官は風流を解せず」[20)] という人目を引く頭注がある。この頭注は、シンガポールの警察の礼儀正しさを強調している。そして、賈希仙の拘束は滔天が康有為の刺客だと誤解され、逮捕される前の記述とほぼ一致している。その記述とは以下のとおりである。

すなわちその傍らの椅子に腰掛け、琵琶を弾じてもって当座の無聊を慰め居たり、時に一支那苦力のツカツカと入り来るものあり、余が傍らに立つて問うて曰く、クンキーとは先生の名にあらずやと、余しかりと答う、彼すなわち首肯き去る、既にして靴音の響聞ゆ、……之を凝視すれば警官なり、一歩一歩進み来りて部屋の入口に至り、忽ちヌツと立ち上り、余を見掛け、右手を掲げてピストルを擬し、静かにせと大喝せり、……然れども余は先づ問を発せり、君は人を見誤るにあらざるかと、その一人拘引状を出し示して曰く、君はこれならんと、余答へて曰く然り、[21)]

『三十三年の夢』でも同様に、名前が確かめられた後に、警察の尋問が行われ、その後の逮捕につながるのである。

② 三回目の香港での尋問および逮捕について

『痴人説夢記』第 16 回では、賈希仙と東方仲亮の二人が香港に着いて上陸しようとしたが、荷物の検査および尋問を受けた後に警察に逮捕された。それについては、旅生は以下のように描いている。

ちょうど上陸を待っていた際に、巡査はすでに到着していた。まず彼の荷物を検査し、二口の日本刀、一万金のお札を見つけたので、彼ら二人を捕えた。しばらくして一人の官吏が尋問にやってきて、「どうして刀を持っているのですか」と聞いた。希仙は「私たちは日本に長く住んでいました。日本人が刀を持つのは、天

下の人に知られています」と答えた。またお札の使い道を聞かれた。希仙は、「これは旅費です」と答えた。その官吏は、「あなたの家は富裕なのですか？こんなに沢山のお札を持っているのですから」と言った。希仙は、「友達からもらったのです」と答えた。その官吏は声を立てず、依然として見栄を張っていた。その後、「政庁があなたたちを拘束するように言いつけたのです」と希仙に言った。希仙は仕方なく、仲亮と一緒に車に乗って警察署に行った。[22)]

『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」において、警察の尋問および荷物の検査について、滔天は次のように記述している。

一応の審問終りて手荷物の検視は始められぬ、しかして二口の日本刀を見出せし時、彼等の意気は頓に揚がれり、曰く、なんすれぞ凶器を携ふるやと、余はこの一時遽かに国粋家となれり、曰く、日本刀は日本人の生命なり、なお耶蘇教家の十字架を帯ぶるが如しと、彼等また敢て追窮せず、一々点検して終に紙幣入に及ぶ、余等当時携うる所約三万金、見て愕然たり、すなわち私語して曰く、これが怪しきものなりと、詳かにその数を検して再びこれを革包に納め、また椅子に返りて謂て曰く、政庁の命なれば是非なし、今より両君を拘引せざるべからず、[23)]

ここに描かれている滔天と呑宇二人の逮捕の経過は、『痴人説夢記』とまったく同じ筋をたどっている。そして、「新嘉坡の入獄」で描写されている二人が拘置された後の、法廷での第一審問は以下のとおりである。

ただし所持金の多かりしはいささか彼の疑を惹きしに似たり、しかり、余等が詐欺の言を弄せざるを得ざりしもまたこの一点なりき、彼れすなわち問を発して曰く、何の要ありてかくの如き大金を携うるやと、余は答えて曰えり、異郷を漫遊するものにしてこの位の金円を携うるは通常なり、未だ知らず貴国人はこれをもって過多なりとなすかと、彼また問う、汝の家は富裕なるやと、余曰く赤貧洗う如し、彼また問う、貧にして如何んかかくの如き金円を得るやと、答えて曰く、余赤貧なりとえども、知己朋友の富裕なるもの少からずと、彼れ問う汝はその知己朋友より資を得るや如何んと、余曰くしかり、彼はなはだ解せざるものの如く、[24)]

以上のプロットから見れば、「新嘉坡の入獄」中の法廷での第一審問は『痴人

説夢記』において香港での逮捕前の尋問のところまで繰り上げられたことが分かる。つまり、両作品における尋問および逮捕などのプロットはほとんど一致している。さらに言えば、『痴人説夢記』第 16 回における尋問および逮捕の理由に関する記述は、『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」を参考にしたうえで描かれたと十分考えられる。

（2）　獄中の描写について

『痴人説夢記』第 17 回において、逮捕された賈希仙と仲亮は警察によって、監獄内の同じ部屋に押し込められた。

> 希仙はまた、「従来の監獄の決まりは、同党の者を同監にしてはならないとなっています。我々のこのようなめぐり合わせはすでに別の囚人と違います。」と喜んで言った。その言葉が終わらないうちに、ふと見ると警察が待ちきれずドアを突き破るように入ってきて、声を発することもなく、仲亮を別の部屋に引っ張って行った。[25)]

賈希仙と仲亮の二人が喜んでいた際に、警察に別々に拘置された。これに対し、『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」には、同じような記述がある。

> しかして呑宇もまた曰く、気長くもたぬと退屈するぞ、しかし二人を同監せしめたるはセメテもの幸なりと、たまたま囂然たる響もろとも扉は開かれぬ、同時に顕われ出でたるは厳めしき一警吏なりき、彼は小時余等二人を凝視し居たりけるが、俄かに無情なる大音を張上げて看守長を呼び、更に酷薄なる音声を絞りて、両人を同監せしむるの不可なるを戒め、直に別居せしむべきを命ず、よって各々引立てられて別監に投ぜられ、互の咳払さえ聞こえぬ所に移されたり、[26)]

上述のように、滔天と呑宇の二人は最初に同じ部屋に拘置されていたが、結局警察によって分けられた。そして、『痴人説夢記』において、別の部屋に連れていかれた仲亮は、東京で出会った、つい先に逮捕された黎浪夫と、偶然に同じ部屋に拘置されることとなった。

> 三人は監獄で四日間をすごした。その日の朝、ある人がドアを開けて入ってきて、

彼らに水浴びをさせた。また仲亮に、「今日はようやく友達と面会できますよ」と言った。[27)]

一方、「新嘉坡の入獄」でも、滔天と呑宇は獄中において三日目を迎える場面に、同様の描写がある。

第三日、この朝六時前、看守長扉を開きて檻中に入り来り、語を低うしていう、君今吾に従い来りて水浴を取れ、そこにて君の友人に面晤せしむべしと、[28)]

以上のプロットから見れば、両作品における獄中の描写は偶然に一致しているとは考えられない。言い換えれば、『痴人説夢記』が『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」を受容した痕跡が十分にうかがわれる。

（3）　審判について

『痴人説夢記』第 17 回では、賈希仙、東方仲亮、黎浪夫の三人に対する審判が次のように描かれている。

しばらくして、果たして召喚して取り調べるにあたって、同監の人は三人に綺麗な服に着替えるように勧めた。ところが、審問所は監獄の傍らにあり、数歩も歩かずに着いた。後ろには、二人の銃を持つ兵士がついている。上には三人の官吏がいる。一人は英国人官吏で、一人は日本の副領事で、もう一人は通訳である。英国人官吏は大机を設置し、上席に座っている。そして、判事官と日本副領事および通訳は下に座っている。警視総監と警部長官は両側で賈、黎ら三人を挟んで、後ろに六人の兵士が立っている。審問では、彼らが乱党であると言っているにすぎない。三人はそれを不服とし、しばらく弁論した。希仙がいきさつを一つ一つ説明し、浪夫、仲亮もはっきりと言った。審問官は日本の副領事に聞いてから、彼らの話した日本の状況に間違いがないことを知った。審問官はしばらく熟考した後に、彼らの罪を免じた。審問官は、警部長に彼らを護送させて、日本の西京丸に乗せて日本に帰国させるものの、香港での滞在を許してはならないと命じた。[29)]

つまり、三人は無事に釈放されたが、香港での滞在が許されなくなったため、日本の船に乗って日本に戻り、再び蜂起を図る方法しかなくなった。

『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」において、滔天と呑宇に対する審判は次のように詳しく述べられている。

> 看守長は余を招けり、いう審問あり法廷に至るべしと、同囚の友皆余に勧めて美服を着けしむ情意豈に掬す可からざらんや、余すなわち白七子の単衣に黒絽の紋付を纏い、白足袋を穿って看守長控所に至る、審問所は獄門の傍らにあり、看守長余を嚮導し、二兵士銃剣にて警固し従う、行て階上に至れば、吾が副領事と三人の日本紳士あり、一人は本願寺派出の僧侶にして、二人は通訳官なり、……
>
> 法廷の中央には、方二間余の卓子あり、その正面に控えたるは審問官にして、その傍らにあるは殖民地太守あり、余は卓子を隔てて相対して佇立せしめらる、しかして右と左には、二人の警官余を挟んで正立し、背後にはまた二人の兵士銃剣を捧げて直立せり、しかして卓子の左側には、一人の陪席判事椅子に掛け、その傍らに吾が副領事あり、通訳官その下に座を占めて、余と斜めに相対せり、しかして右側には警視総監と警部長控え居たり、この両人は旅館に踏込んで余等を拘引したるものなり、……
>
> 既にして審問は始まれり、彼れ問い余の答ふる所、ほぼ前日旅館におけると大差なし、……遂に吾が副領事を顧み問うて曰く、貴国実にかくの如き国風ありやと、副領事答ふるにこの事あるをもってす、しかもなお氷解せざるものの如くなりき、次に疑を惹きいしは余等携うる所の刀剣なりき、彼れ問うて曰く、刀剣は何のためにこれを携えたるやと、余また大和魂論をもってこれに応ず、彼れはなはだ腑に落ちざるものの如く、また我が副領事を顧みてこの事あるやを問う、副領事また首肯してしかりと答え、かつ敷衍陳弁して己れもまたこれを携うることを述ぶ、すなわち彼れまた通弁を顧みてこれを問う、答えて曰く携え居るなりと、彼れ始めて解色あるものの如くなりき、[30)]

この後、滔天と呑宇の二人は、第二の審問を経て、遂に無事に釈放された。ただし、新嘉坡から五年間の放逐を命じられた。そして、翌日出航の日本の郵船に乗船しなければならなかった。

以上のような両作品のプロットを読み比べると、『痴人説夢記』は『三十三年の夢』の中の「新嘉坡の入獄」に見られる審問をまとめて取り入れており、人名に加えて、場所を新嘉坡から香港に変えただけであることが分かる。つまり、両作品に見られる審問の描写において、単語まで一致しているプロットがある

ことからも、その受容関係はすでに明らかである。

『三十三年の夢』において最も読者の興味を引きつけるのは、「新嘉坡の入獄」であると言っても過言ではない。作品の物語性もこれによって高くなったと思われる。旅生が、この章を読んで共鳴を受け、興味深いプロットを自身の小説に巧妙に生かしたことは間違いない。「新嘉坡の入獄」からの受容を通して、作者旅生は主人公賈希仙たちに試練を与えることができ、成功までの紆余曲折も巧みに構築できたものと思われる。この受容した部分はもちろん、『痴人説夢記』の物語性を十分高めることができた。

５．両作品の類似点について

『痴人説夢記』は『三十三年の夢』と非常に類似した構成と内容を持っている。以下、この両作品の類似点を通して、両作品の間に存在する可能性のある影響的位相について見てみる。

(1)　夢を主題とする類似性

『三十三年の夢』の漢訳本の題名は依然として夢を用いて「三十三年落花夢」と名づけた。滔天は「自序」において、「嗚呼人世元これ一夢場、『三十三年の夢』はその一部のみ、今、公にしてもって夢を説くの痴人となる、余豈賢者の笑を拒むものならんや」[31] とし、終章の最後で「嗚呼世事人事、悟り来れば総て夢なり、悟らざるもまた夢なり、夢の世に夢を逐うて、また更に新なる夢に入る」[32] としている。作品の内容は、「半生夢覚めて落花を懐う」に始まり、「唱わんかな落花の歌」に終わる。つまり、夢に始まり、また夢に終わり、終始、夢を主題としたのである。

一方、『痴人説夢記』は、賈希仙の父守拙が夢で「仙人島」を見た場面で始まる。結局、息子希仙は本当に仙人島を見つけた。そして、仙人島での改革成功をやり遂げた。仙人島は完美な、豊かな島となり、耕作はすべて機械化し、島内の旧勢力を打倒し、統一組織を作って、外国との通商を開始した。つまり、小説において、賈守拙の「仙人島」の夢が実現できたのである。さらに、小説の最終回では、仙人島に来た賈家の親戚である古老がまた、更なる強くなる「中国将来の結末」という中国の未来の夢を見て終わる。言うまでもなく、小説の主題は、新しい自由平等の国家を建設する幻想を表わしている。

『三十三年の夢』は滔天の、失敗した中国革命から世界革命まで発展しようとした夢である。『痴人説夢記』は作者旅生の未来の理想的な夢であり、ユートピア思想でもある。両者の夢は異なるものの、両作品はともに、夢を託し、夢を主題としている。そして、旅生の『痴人説夢記』が『三十三年の夢』を念頭において命名されたのではないかと思われる。

つまり、夢を主題とするという点においては、類似している。

（2）　侠気、冒険と海外殖民に見られる類似点

『三十三年の夢』を通して、滔天自身が中国革命に献身した侠気をもつ人物であることは、すでに同時代の中国人に広く知られていた。滔天の侠気としての行動様式は、中国革命の援助という行為に現れている。そして、すべての漢訳本に付いている孫文の序で、滔天を「現代の侠客」と呼んでいるように、中国人の間では、滔天という名前そのものが、侠の代表のような存在である。

『痴人説夢記』は、同じく「侠」の精神に貫かれている。実際には、この「侠」という概念は中国においてもともと、墨子以来の伝統を持ち、最初から政治と結びついていたものである。[33] 清末の変法運動や救亡運動が起こった時期に、中国知識人は再び、「侠」への関心を抱くようになった。例えば、譚嗣同は『仁学』において「日本がよく変法自強の効を収め得たのは、その俗が好んで帯剣行遊、悲歌叱咤、その殺人報仇の侠気を挟んで、出でてその革新の機運を鼓したからである。」と日本的遊侠に共感と羨望をもって語った。[34] そして、保守派から「陽儒陰墨」と譏られた梁啓超は湖南時務学堂で総教習を務めた際に、「日本のよく自強せし所以はその始め、一二の藩士の憤慨激昂、義憤を以て天下に号召し、天下これに応ぜしに由る、みな侠者の力なり。」と日本の「侠」を鼓吹した。[35] また、梁啓超は『記東侠』という文章においても同様の論調で日本の「侠」を高く評価している。[36]

以上のように、清末中国での「侠」に対する鼓吹は、日本と密接な関係にあると言わなければならない。加えて、『痴人説夢記』における侠気も孤立して存在しているものではない。

慕隠、綴紅姉妹の兄である富豪陳企辛は、「友達を作るのが非常に好み、よそから来た人がいれば、名刺を渡して、すぐ面会する。食事を与えたり、泊まらせたり、また旅費を与えたりする」[37] というような侠気をもつ人物である。

後述のように、『痴人説夢記』には、中国人志士を助け、革命を支持する、侠

気をもつ日本人志士である藤田宮錬、吉田晋二が相次いで登場している。

賈希仙、寧孫謀、魏淡然、黎浪夫、東方仲亮などは皆、八方手を尽くして中国を強くさせるために尽力する侠気をもつ志士である。

『三十三年の夢』には、滔天を援助する女侠が数人挙げられている。『痴人説夢記』は『三十三年の夢』同様に、男性に侠気を与えるのみならず、女性にも侠気を与える。寧孫謀、魏淡然は池に落ちた慕隠と綴紅を救った後に、封建的な倫理観念に鑑みて、二組とも結婚に至らなければならなかった。その後、寧孫謀、魏淡然の改革の失敗を耳にした両女侠は復讐のために首都へ赴く。結局、綴紅は殺され、慕隠は一人で復讐しようとしたが、八カ国連合軍が首都に攻め入り、復讐相手である胡道台はすでに亡命したために、復讐計画を中止にせざるを得なかった。言うまでもなく、慕隠と綴紅は維新改革の志士を助ける女侠像として描かれている。

以上のことより、『痴人説夢記』は、維新を主張する人物、革命を訴える人物、殖民を唱える人物、そして女性像について、いずれも皆侠気をもつ人間像として登場させていると言える。

次に、両作品に見られる冒険と殖民が相互に結びついている点について論じる。

『三十三年の夢』の第 11 章「暹羅遠征」、13 章「第二の暹羅遠征」には、滔天の冒険と殖民が述べられている。滔天の二回の暹羅遠征はともに、死神と戦う冒険であった。暹羅ですでに同行の数人が病気で死亡し、病気にかかった滔天は生死の境を漂う際に、「柳田君の発議に従って永別の離盃を挙げ、氷もて冷せし黒ビール一杯を傾け尽したる」[38] ということもあり、熟睡した後、意外に早く回復できた。このビールが、「生き返る香料であり、命を助けてくれる舟」[39] となった。

『三十三年の夢』における殖民の目的は、殖民の基を定めることにあり、日暹両国の将来の幸福のためであった。暹羅の殖民は、移民の病気やシンガポールへの逃走のため、極めて困難な節目に迫られる局面となった。こうした際に滔天と同志たちは「直に暹羅全部を目して殖民に適合せずとなし、もって永くこの事業を湮滅せしめんとす」[40] という事態を防ごうとした。皆で「自ら鋤鍬を採って耕作に従事し、一収穫期の間試作を行うて殖民の基を開き、もって理想郷の礎を作るは如何と、皆拍手して善哉を叫び、議すなわちここに一決す」[41] となった。そこで、皆で奮闘の末、「帝力庵の新梁山泊ここに成る」[42] という

場面も見られる。

『痴人説夢記』における海外殖民は『三十三年の夢』同様に、死と戦う冒険である。賈希仙たち六人が仙人島に初めて上陸した際、賈希仙は重い病気にかかり、島の教主に牛乳を日々与えられ、後に薬王寺の老人の薬を飲んで命を取り留めた。それから、航海中、賈希仙が大鳥にくわえられ、しばらく空中を旋回し、砂浜に落ちたが、また潮に巻き込まれてしまい、結局アメリカの船主に助け出された。そして、小船に乗った東方仲亮は、小船ごと鯨の口の中に吸い込まれた際、さおで鯨の上顎を突き、結局小船ごと吐き出され、助かった。

海外殖民の目的は、賈希仙が「我輩の洋行はすなわち西洋の言うところの殖民政策である。中国はもともと、人口が多いのを嫌うため、もし海外に殖民すれば、中国に大いに有利なことである」[43] と主張したとおりである。そこで、全島で教育を行い、外国との通商を通して商品を輸出し、仙人島が遂に豊かな島となった。

以上から分かるように、滔天を救った黒ビール同様、旅生は『痴人説夢記』にも賈希仙の命を取り留めた牛乳を登場させている。これも恐らく偶然ではなかろう。いずれにせよ、両作品は、冒険を伴う海外殖民という点で共通している。『三十三年の夢』は実在する殖民であるのに対し、『痴人説夢記』は想像上の殖民であり、ユートピアの建設でもある。しかしながら、殖民という形式は全く同様であり、「新梁山泊」と「仙人島」は同工異曲の妙がある。

つまり、両作品における侠気、冒険、海外殖民という類似点から見れば、その受容の可能性が更に高くなると思われる。清末における殖民を主題とする小説は、管見によれば、『痴人説夢記』の前に刊行された一作品に限られる。それは 1902 年の『新民叢報』第 20、22 号に掲載されている、未完のままの四回『殖民偉績』である。これに関しては別稿に譲るが、この『殖民偉績』はまた久松義典の『殖民偉蹟』の影響を受けた作品である。海外殖民という主題から見れば、旅生は『殖民偉績』の啓発を受けた可能性も否定できないとはいえ、[44] 小説の内容からすると、やはり『三十三年の夢』を下敷きにした可能性が最も高い。そして、同じ『繡像小説』第 21 期から連載され始めた、日本人の義士藤田玉太郎の登場を伴う、35 回の『月球殖民地小説』があるが、『痴人説夢記』の連載は『月球殖民地小説』より二期、約一ヶ月繰り上がることから、その影響を受けた可能性は恐らく低いと思われる。

（3）　登場人物の形象に見られる類似点

『痴人説夢記』には主人公賈希仙の他に、寧孫謀、魏淡然、黎浪夫、仲亮などの主な登場人物がいる。そして、また日本人志士の藤田宮錬、吉田晋二の二人が登場している。

藤田宮錬は、第10、16回に登場する日本人である。この藤田は中国の豪傑との付き合いを好み、無償で中国人志士を助け、無理やり渡された謝礼を学堂に寄付する侠気をもつ人物である。

第16回に登場する吉田は、黎浪夫の友人である。この吉田も藤田同様、中国人志士との付き合いを好む人物である。黎浪夫が吉田のことを仲亮、孟核に次のように紹介している。

> 私には吉田晋二という旧友がいます。世間に知られている英雄です。私は今日彼を訪ねましたが、会えませんでした。家族によると、佐渡に行ったそうです。仕方なく、彼を数日待つことにしました。会ってから行き先を相談します。[45)]

ちなみに、ここに現れている「佐渡」というところはおそらく、『三十三年の夢』の第24章「大本営（佐渡丸船中）」の中の「佐渡丸」にちなんで名付けたものである。数日後、黎浪夫は吉田の帰宅を耳にし、仲亮、孟核とともに再び訪ねて行って、遂に面会するができた。仲亮、孟核の二人が目にした吉田は、「小柄な人で、精悍の気が顔にあふれている。年齢は三十歳あまりである」[46)] 人物として描かれている。しかも、仲亮、孟核はまず、英語で吉田に名前や号を尋ねた。

談話の中で、賈希仙が吉田を賞賛していたという話を黎浪夫から聞いた吉田は次のように述べている。

> あの方（賈希仙のこと――引用者注）が英雄であることはかねがね伺っております。東アジアを振興させるには、恐らくこの人に頼らなければなりません。加えて三人の補佐もありますし、事業が成功するかどうかなど心配する必要なかろう。現在、欧米の風雲がアジア大陸を広く覆っています。弊国は小さいものの独立国家であり、広大な海域を支配しています。ただ貴国は現在でも、旧習を守り、法制を変えようとしなければ、恐らく列強に併呑されてしまいます。あなたたちは一般の国民であっても、何とかしなければなりません。私は一臂の力をお貸しし

ようと考えています。皆様は事業の基礎を創立できませんか？[47)]

上記に現れた吉田の賈希仙に対する大きな期待は、あたかも『三十三年の夢』第 17 章「興中山主首領孫逸仙」において滔天が、幾多の曲折を経て会うことができた孫文に対する期待と全く同様である。そして、『三十三年の夢』において滔天と孫文との面会場面および訪問回数は、『痴人説夢記』と同様である。滔天は、一回目に孫文に会うことができず、二回目に遂に願いどおりになった。しかも、孫文が最初に、英語で「お上がりなさい」[48)] と滔天に声をかけたのである。そして、滔天は孫文との初対面の際に、中国、アジアおよび世界の形勢について深く議論していた。二人の議論の本筋は、上述の『痴人説夢記』における吉田の言論と完全に一致していると言っても過言ではない。

『痴人説夢記』における両国志士の談話の中で、黎浪夫が賈希仙の命令で中国へ様子を探りに行くということを聴いた吉田はまた、近く中国に行くため、先行の黎浪夫と香港での再会を約束した。

上述の一連のことからも、賈希仙と吉田との関係は、あたかも孫文と滔天との関係のようであることが分かる。この吉田はその後に現れていないとはいえ、容貌、年齢、アジアを振興させる言論、中国を援助する主張および中華圏の旅などから推測するに、『三十三年の夢』における中国革命を扶助する滔天をモデルにしたと十分に考えられる。

なお、賈希仙が作者の理想を代表し、寧孫謀、魏淡然はそれぞれ康有為、梁啓超を代表し、黎浪夫は孫中山を代表していると指摘されている。[49)] しかし、本稿の考察では、賈希仙像には孫文の人間像も明らかに含まれている。例えば、賈希仙は広東城の乗っ取りを計画したが、失敗したため日本に亡命した。そして、吉田の「東アジアを振興させるには、恐らくこの人に頼らなければなりません。」という言葉などによると、賈希仙像には、『三十三年の夢』における孫文の姿が映し出されている。他方、賈希仙の仙人島での改革および建設から見れば、賈希仙像には、康有為、梁啓超などの人間像も多少うかがい知ることができる。以上のことから、作者旅生が多くの人物形象を賈希仙一人に集中させていると思われる。これはおそらく旅生が中立的立場にあったためである。

こうしたことから、両作品における登場人物の形象および人物間の関係には明らかな類似点が存在すると言える。さらに言えば、『三十三年の夢』における滔天というモデルがあったからこそ、旅生は『痴人説夢記』において生き生き

とした日本志士の人物像を描き出すことができたのである。

以上見てきたように、『痴人説夢記』と『三十三年の夢』の間には数多くの類似点が見られる。これは単なる偶然ではなく、旅生は『痴人説夢記』執筆に際し、『三十三年の夢』から何らかの影響を受けたからであると十分考えられる。

６．旅生が目にした『三十三年の夢』の版本について

ここまで『痴人説夢記』における『三十三年の夢』の受容の様相について見てきたが、『痴人説夢記』の作者旅生が目にした『三十三年の夢』は結局、日本語の原作であるかそれとも漢訳本であるか、検討してみる必要がある。しかし、作者旅生に関してはまだ未知な点が少なくない。しかしながら、資料も限られており、最も重要な手掛かりである本名すら考証することができない。そのため、本稿では旅生が目にした可能性のある底本を推測するにとどめる。

まず、旅生が目にした底本が原作である可能性を分析する。『三十三年の夢』、その漢訳本『三十三年落花夢』および『痴人説夢記』の三者を照合した結果、少なくとも二つの共通点が見られる。一つは、警察の礼儀正しさを強調している点である。前節で見たように、『痴人説夢記』に影響を及ぼしたと見られる、原作の第 23 章「新嘉坡の入獄」の冒頭に「文明的警官は風流を解せず」[50] という人目を引く頭注がある。しかし、この頭注および当該の意味を表す言葉は、漢訳本『三十三年落花夢』には現れていない。もう一つは、両国志士の初対面の際に、英語で挨拶する場面があるという点である。原作で孫文と滔天との初対面の際に、孫文が英語で滔天に声をかけた場面は、『三十三年落花夢』にも見られない。以上の二点から、旅生が原作を目にした可能性は十分あると考えられる。

原作を目にした可能性が高いものの、漢訳本を底本にした可能性がまったく存在しないわけではない。旅生が目にした版本が漢訳本であったら、いったいどの漢訳本であるのかについて、以下検討してみる。

結論から先に言えば、底本は『三十三年の夢』の最初の漢訳本『孫逸仙』ではなく、『三十三年落花夢』である。なぜなら、それは小説の内容から判断できる。例えば前節で照合したように、「第三日、この朝六時前、看守長扉を開きて檻中に入り来り、語を低うしていう、君今吾に従い来りて水浴を取れ、そこにて君の友人に面晤せしむべしと」、および「同囚の友皆余に勧めて美服を着けし

む」などの内容は、『孫逸仙』には訳出されていなかった。しかし、『三十三年落花夢』では原作どおり翻訳されている。

以上のことから、旅生は日本語ができた可能性があり、そのうえで原作『三十三年の夢』を目にしたと考えられる。さらに、発行時期から見ても旅生は『三十三年落花夢』をも目にした可能性も皆無ではないと思われる。

７．おわりに

以上、清末小説『痴人説夢記』を取り上げて、宮崎滔天の『三十三年の夢』を受容した痕跡について考察した。

『三十三年の夢』は近代中国においてその政治的影響力が発揮されたように、文学作品への影響もかなり大きかった。旅生は『三十三年の夢』における最も物語性の高い部分に強く共鳴したため、自らの『痴人説夢記』の人物像やプロットなどの点でそれを受容したと思われる。しかも、旅生は『痴人説夢記』において、ただ『三十三年の夢』を盲目的に取り入れたのではなく、受容の様相が見分けられないほど巧妙に活用している。

『三十三年の夢』における逮捕や尋問などの描写は、『痴人説夢記』のプロットを豊かにしたのみならず、その展開に不可欠な役割を果たしたと考えられる。さらに言えば、旅生は『三十三年の夢』を目にしたからこそ、『痴人説夢記』の物語性をより一層強めることができたと考えられる。

一方、『三十三年の夢』は孫文と滔天との関わり、および二人の人間像を最も早く描いた作品である。清末中国において、『三十三年の夢』が孫文および滔天を同時代の小説に登場させるのに、先駆者的役割を果たした。『三十三年の夢』があったからこそ、『痴人説夢記』も同様に、孫文および滔天をモデルにした中日両国志士の個性豊かな人物像を描き出すことができたと言える。

『三十三年の夢』の影響は『痴人説夢記』のみならず、『孽海花』『党人碑』『大馬扁』など多くの清末小説にも波及し、そこでは孫文および滔天をモデルにした革命者の人物像が生き生きと描き出されている。加えて、『月球殖民地小説』などの清末 SF 小説でも滔天のような義侠心のある日本人が登場している。清末小説における日本人の義侠像に関しては、興味深い検討課題として、稿を改めて述べたい。

＊本稿は 2007 年 3 月に名古屋大学に提出した博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容――日中近代文学交流の一側面――』の第九章をもとに加筆修正を施したものである。

注

1 拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』について」『言語文化研究叢書 8 メディアを読み解く』名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2009 年 3 月。拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について」『言語文化論集』第 31 巻第 1 号 2009 年 10 月を参照。

2 前掲拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』について」と「『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について」を参照。

3 拙稿「『孽海花』における『三十三年の夢』の受容」『言語文化論集』第 31 巻第 2 号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2010 年 3 月。

4 阿英は『晩清小説史』（人民文学出版社 1980 年 8 月 p 30）において、「全面的に清末社会を描写した小説で、著録する価値がある」と評価し、欧陽健は『晩清小説史』（浙江古籍出版社 1997 年 6 月。初出「『痴人説夢記』在晩清小説史上的地位」『南京社会科学』1992 年第 2 期）にて、「清末の長篇小説において最初に完結された作品である」および清末中国の「正に肯定的な理想の人物を中心とした、完備した構成を有する最初の長編小説である」と高く評価している。そして、『中国近代珍稀本小説』第 15 巻（董文成・李勤學主編、春風文藝出版社、1997 年 10 月）の「痴人説夢記・前言」にも、「近代中国初めての、改革開放と中国振興を主旨とした、肯定的な理想人物を中心とする長篇小説である」という評価もある。また、顔健富は「進出神仙島、想像乌托邦：論旅生『痴人説夢記』的空間想像」（『台大文史哲学報』第 63 期、2005 年 11 月）で、ユートピアの視野から、李斌は「略論晩清小説之現代性意向：以『痴人説夢記』為例」（『科技信息』2008 年第 26 期）で、現代性の視点からそれぞれ論じている。

5 作者旅生については、欧陽健『晩清小説史』にも未考証のままである。中野美代子（阿英著、飯塚朗と共訳『晩清小説史』第 3 章注 14「旅生」）によると、「あるいは朱瘦菊（生卒年不詳――原注）筆名は海上説夢人のことか。『名家小史』によれば、旅行を好んだとあり、旅生なる筆名と符合する」とのことである。なお、途中で旅生が続著した『維新夢伝奇』は同じく『繡像小説』第 19 期から第 25 期まで掲載し

ている。

6 樽本照雄「南亭亭長の正体――『繡像小説』編者論争から始まる」『清末小説』第14号、1991年2月、後に『清末小説探索』（法律文化社 1998年9月）に収めている。

7 前掲欧陽健『晩清小説史』 p 231。

8 阿英『晩清小説史』人民文学出版社 1980年8月 p 34。

9 前掲欧陽健『晩清小説史』 p 237。

10 王孝廉等編『晩清小説大系』、台北・廣雅出版有限公司、1984年3月。

11 『中国近代小説大系』、江西人民出版、1989年12月。

12 董文成・李勤學主編『中国近代珍稀本小説』、春風文藝出版社、1997年10月。なお、本稿で拠った『痴人説夢記』の底本はこの『中国近代珍稀本小説』第15巻である。

13 林鯉・雒三桂主編『中国歴代珍稀小説』、九洲図書出版社、1998年5月。

14 『痴人説夢記（清）旅生――読吧』
（http://www.du8.com/books/fre0901033.html）

15 樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社 2002年4月 p 73。なお、欧陽健（前掲『晩清小説史』p231）は、大体1904年2月から1905年3月までだと指摘している。

16 郭浩帆「『繡像小説』創辦、刊行歴史追溯」『清末小説』第23号、2000年12月。樽本照雄「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」『清末小説から』第64号、2002年1月。後に『清末小説叢考』（汲古書院 2003年7月 p 231-247）に収めている。

17 前掲阿英『晩清小説史』 p 34。

18 『痴人説夢記』（『中国近代珍稀本小説』第15巻所集） p 442-443。以下中国語からの引用はすべて拙訳により、原文は省略した。

19 前掲『痴人説夢記』 p 443。

20 本稿で拠った『三十三年の夢』の底本は、初版（1902 年国光書房版）を底本にした『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』（日本図書センター 、1998年8月）である。『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 226。なお、『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』の各章には番号が付いていないが、論述の便に鑑み、本稿では筆者が番号を付けた。

21 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 226。

22 前掲『痴人説夢記』 p 443-444。

23 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 228。
24 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 238。
25 前掲『痴人説夢記』 p 445。
26 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 232。
27 前掲『痴人説夢記』 p 446。
28 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 235。
29 前掲『痴人説夢記』 p 446。
30 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 237-239。
31 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 18。
32 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 300。
33 島田虔次「あとがき」、島田虔次・近藤秀樹校注『三十三年の夢』岩波書店、1993 年 5 月 p 500 注（11）を参照。
34 島田虔次『中国思想史の研究』京都大学学術出版会、2005 年 4 月 p 56 を参照。
35 前掲『中国思想史の研究』 p 56。
36 梁啓超「記東侠」『時務報』第 39 冊、1897 年 9 月。
37 前掲『痴人説夢記』 p 333。
38 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 121。
39 この「生き返る香料であり、命を助けてくれる舟（為余返魂之香、奪命之舟）」という文句は、金一訳『三十三年落花夢』（上海国学社、1904 年 1 月 p 42。）中の加筆である。
40 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 122。
41 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 122。
42 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 123。
43 前掲『痴人説夢記』 p 528。
44 欧陽健は前掲『晩清小説史』において、「賈希仙が中国化された維廉濱である」と指摘している。
45 前掲『痴人説夢記』 p 441。
46 前掲『痴人説夢記』 p 441。
47 前掲『痴人説夢記』 p 441-442。
48 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 149。
49 前掲阿英『晩清小説史』 p 34。
50 前掲『宮崎滔天 ： 三十三年の夢』 p 226。